

Box 1.5

Ikeda, Tsukiko Nagura "Falling Leaves" mss in Japanese  
\*Rehoused as BANC MSS 2002/353 cz Volume 1\*

undated

2002/353



さて大袈裟にも漫遊中の感想など、申ましても素より  
浅学無識の妾況して拙考ある算の運び何の興味もあり  
ません寧ろは災草の種でありますか順序と致しまして  
横濱出帆より着米迄の日記の要概を抜筆致しまして  
しかつた事甚しかつた事愉快なりし事なども書き連収  
ました上外ふの家庭の様様夫婦間の有様婦人お就ての  
感想と申す様ふ点と日本婦人としての要の立場より観  
望する点と戦<sup>戦</sup>柳のそれとを対照致しまして敬愛する  
同胞姉妹諸君の参考や供したものであります  
先づ妾は多年の希望漸々の思<sup>ひ</sup>で船へ乗る事が出来ま  
した其嬉しさは何と譬へん様もほたいませんでした唯々



六十路にあまる父母と後よしこの船をこけ離別が  
 いとも悲しく感じました  
 今日しも見送り給はりし母の影見えざるまで甲板の  
 上より立ち上りし思懐と希望の板挟み少時しが程は涙み  
 ちれましがが想へば此の數多き船客の方々中みは中し  
 へ嬉かるべき新婚旅行の言もありふん父母の危篤の病  
 氣が急かるにありありぬるし妻一人のみ悲しき身にも  
 あるまじと漸く知て勵まし心の野の牛綱を引き締めます  
 一左無情の船は其等悲喜同じからざる方々を一様に乗  
 せまゝて各異なり所々運びまゐるここの端々にも寂し  
 始めて人生の浮世の様がありくと感じられました



されば雲一き横濱もそや雲霞の同く蔽はれ遠洲離の差  
 し批りまゝそのは黄昏頃そよより神戸門司と逢ひまし  
 なが此處を本土の名流と致しますや甲板に立ち出で  
 まゝて少時く故山の風景に憧憬の情を感みまゝた  
 遠洲離や船を海下も多少は苦しく感ずまゝたけ共  
 先づ例もよりは安穩の方でありまゝなが我例三離の一  
 たる云海離に夏抵りますと如何にも船の動揺は殊に  
 とは塩梅が異なりまゝて歩一步激烈と云う眩暈は致し  
 まゝ頭痛も加わり雲霞を僅し食事は一切取れませず遂  
 には黄色の胃液まのみ吐し揺れをりまゝた其都度の苦  
 痛は実堪せられなうなりぬは解し兼ねます程で叶わ



ぬ時の神頼みとやらあらゆる神佛に祈りまゝに想へば  
 前途尚ほ逢ひき遠航の心元と感ぜらるゝたのてす  
 斯く云海難も苦悶の裡に過ぎ延て稍や航海も慣れ  
 時折は甲板に出まゝ眺る一望千里の雲大なる万  
 丈の怒濤を視しむ様をふりまゝに甲艦に支那上海に着  
 し上陸の上隈をく見物致しまゝに今宵陰曆六日の月は  
 中天を懸りまして皓々清氣を帯びたる光は万界を照ら  
 して居りまゝに石壕に在郷にも同じく此の月は宿るらん  
 懐しき妻の父母は如何に此の月をほ望しおかしらん不  
 と想ひは千々に走りまゝに漸くおゝて臥房に入り電燈  
 と消しまゝと月光窓を徹おして枕頭を来り枕半夢を伴



ぶて何時にか此に出帆せしより左  
 ちやうど郷を去りて一千里船は香港に近く人の住  
 める島影やがては遠かき支那大陸の一角も眼を  
 才一才二才三の燈台より香港海峡に進み石九龍島  
 を望み左の香港を眺めよりて恰かも本國の門司と馬関  
 の様子覺へし左船より眺望致しより左地は日本  
 の筋庭的の如き大の趣を異にしまして大陸的確  
 渾其大の様を感しましたる島海一言教へ左いのは女皇山  
 の頂上より見る鋼索車でありまゝ勾配頗る峻しく高さ  
 一哩以上もある山頂より見る僅かに十分間でありま  
 し山頂よりの眺めは又左特別瀟々たる雄帆樯の林之

附録  
 雄帆樯の林之



く愉快に感ぜられた女が知らず妾も帝國子生れし光  
榮も~~因縁~~ふつと帝國万歳と三喝致しました  
妾の乗水の船は間もなく出帆致す事となり笛一声山  
谷へ水應じ早くも港外に出でました後は僅かに支那大  
陸と在る模糊の間を望みまゝして~~浮橋~~たる大海原崎  
支那海の名物たる橘上鷹<sup>海</sup>来りて~~翼~~と休めまゝ~~金~~を見  
與ふ位にの事夜に至れば陰曆十三日の月日皎々と牙  
へ返り水と天と照らしてまゝて海波躍らず蒼海壁玉と  
弄して金波十里と照らすもの~~幕~~<sup>ヤ</sup>海上の明月感興持た  
深かりさるを得ませんでした妾は餘り耐へ難きまゝ  
左の一句を月詠の餘白に記入しました



月は空に響く鐘声枕に落つ睡眠まぬ夜の拂曉燈火  
 氣博く旅情の風既いと深し

春の花皇の風秋の月冬の雪ととりぐさあわれはあれと  
 特ふ趣味尋し追懐深きは月子やあらんされば古来より  
 我國子ては月子耕しての感興大宮人は云ふも更らふ  
 り文人雅客さては想文賤の女子まゐるふてまね相應の興  
 を覺ぬはあし此の都雅心の奥床しさは外に國人の富  
 ら文明とのみと誇りけるふ比べて都々ふ真似らるべし  
 業ありすさてもう如き事の限りこそ  
 體て解は新嘉坡の着しまし左此處は横浜と距りまゐるこ  
 と三々二三百三十哩はきさうぎの末つ方今しも綻び始



めん百花王の勇ましく潔き蕾の早春の候でありました  
 けれ共流石に赤道直下の事として寒暖計は百と五度其の  
 差し暑さはとても我同本土よりは<sup>暑</sup>覚られず昼夜流汗淋  
 漓拭ふ手も飛れる程で恰も炎蒸火爐の中より居るが如  
 き暑さでありましたので誰れ一人寝て就ても眠る事は  
 出来なかつたので~~あり~~ありあり

新嘉坡はげにでく彩色の石版畫かしかもその彩色はど  
 くくしき鍾具もて塗つけた拙畫の如く少しも瀟洒の氣  
 色と云ふに至りましては美術家の眉を顰むる所でありませ  
 う所を出帆しまして船は英領彼南子着しました酷烈燄  
 くが如き暑氣は加ゆる計り乗客の多くは甲板に卧し上



した

いふまいと思へば暑さ

いやまさる

この所は新嘉坡よりは田舎でして家並も荒みて見おま

しなが六哩余を~~経~~る公園ふは地~~あ~~り溪~~川~~ありまして園~~あ~~は麓より漸々山~~あ~~に登~~る~~のでして歩々景色~~か~~愛~~し~~て心

地のよいところはみふばかりもふく植にみの樹木はこ

く熱帯の花卉草木も集め~~る~~ものであ~~る~~は~~ま~~の月~~は~~新~~ら~~しく~~た~~に~~妙~~々~~と~~感じました

次は英領錫蘭島の首府印度の古俞母港に着きました兼

て噂の間きましたよ~~う~~は海は穏でありました暑気は



此處で妾は此の印度人の風俗を申述べたいと思ひます  
妾のシンカポールで見ました黒人は赤い金布を腰に  
たりし纏ひ白布を肩より脇に纏んで居りました南蛮鉄  
見の様子胸額を露はし或は赤裸々たる者等ありました  
他南では黒人の娼婦を見かけました黒人の顔と眼光  
白く輝き鬘りは金輪と通ひし唇厚くして歯は際立ちて  
白く其相模の怖ろしくも人々を食ふ鬼かとも思はれまし  
たコロンの港のお人は係り異なりたる点は見抜けませ  
んが此以ては僅かに腰部にのみ物と巻附たりたるの  
みでありまして其胸には数々蛇が生へて居る風体な  
るはあれども人の子あるべきかと驚く計りでありませ



地平線上月は夜兔の如く行くとして昇りその金  
 色黄金の如く稍や紅を含みて直径八九尺も降り  
 昇るに従ふて明珠々野は忽ち紫色を帯びて清  
 冷云はん方なく一隊の土人は駱駝を跨りて月  
 の邊に運河を浴ふて煙の行衛を造る様荒涼凄  
 惨と評すべきも亦左天来の祝福は彼等の上  
 にも漏れさるものあると覺へましかる月時  
 其光景の雄渾あるを驚かし左平沙万里人烟を  
 絶つとはげと斯るは漠の中を行き暮れたる旅  
 人の心緒をさるべくあゝこの雲もさき  
 頃も教あれば故郷を懐ぶの心特に切なりし  
 ことよ頃には弥生の半ば桜及ボートセツト  
 二篇一玉一石長く海



望千里天地正火の氣 ~~好~~ 我が精神を包めは其快感何物も  
 及ぶものあるべしとも覺へませんのであります  
 きれば下船後直ち小燕船に乗るかへまして夕景快  
 獨逸のハッフルツク小着まして市内見物小雨云々  
 費やしサウサとやす至て閑静なる田舎旅館に逗留いた  
 しまし ~~て~~ 船海の趣れを ~~癒~~ 癒する事と定め此よりベルリ  
 ン市コローン市等へも見物しました頃は丁度半月  
 の初めとして春の氣は日々加はり初夏の候にも近き頃  
 でありますから暑からず寒からず快處も被處も群花妍  
 を争ひ百草芳を呈するの好時節別と爲すべし事もなく  
 毎日山子河子田園子遊び暮しましたので妻が生れこの



ものが街路に面したる幅が二十五呎から五十呎あり  
 まして奥行百廿五尺から百五十呎であります勿論場所  
 に依りますしこれは廣大な庭園を囲みたる富貴もあります  
 け此共中から以上各づつの中位に迄の間隔は僅かに  
 呎か廣きも十呎であります日本の住家の敷地は比でま  
 したる頗る寛大で不愉快の感がありますので又都心の  
 市街地の層敷はありますと家と家とが壁合せなつて  
 居りますし僅かに前後庭に少しの空地を餘すのみで  
 あります新様な地城に種々なる花草植木など  
 並列致しまして其空地一面を青草と以て蔽ふ事になつ  
 て居ります此義知の園に米田は新園の園でありますか

「上の中位に這の尾、又地味形あり、  
秘隠たるのひかりありす。」



定住者おおく延び

ら、都會地の屋敷は3名と借家であり、ます、角も屋敷  
 構は頗る上手に出来て奇麗に見えますが、奥床から威  
 嚴ある気持は餘り見受けませぬ。で、我々のそれとは稍や  
 物とらぬ心地が致します。  
 念の構造は千差万別でありまして、伊太利式もあるが  
 佛蘭式もあり、独逸風もある、日本風もあると云ふ次第  
 でありまして、先づ大概は三階建てであります、数年前まで  
 は、この住家は、大け高く一階の高さ十五呎より二十呎  
 もありまして、左が近頃は、大概十呎から十二呎位の高さで  
 あります、是れは大に建築費を削減して居ると思ひます  
 それで、家人の住室は、其の三階の中階を用ゆる事になつ



て居ります此處一言申添へ度きは西洋の竈は例のペン  
 キ塗りでありまますから年々一回或は二年々一回新たに  
 ペンキを塗り代へますと全く新らしき家の様子になりま  
 すのは極めて便利で見栄が宜しいのであります今一ツ  
 申置きたいのは日本では竈を新築しまするものは坪数を  
 限られます何故なれば畳を敷くのですから畳が敷ける  
 様子間取を制限せなければならぬのです此共洋館は  
 思ふ儘に間の廣さを定むる事が出来るのです是れは畳  
 の様子一定した物を敷かず段通即ちカーペットを敷く  
 のですから室の形が四角でも三角でも隋円形でも差支  
 はありませんから家の形が千差万別を認める、沢々



油絵 水彩画 墨の大 小糸 麗ふ 顔

でありす  
 室内の装飾  
 西洋では従て彩色の配合對照と云ふ事  
 意を用ひますので室内の曲の壁の色合に從ひまして  
 敷物から懸布から椅子などの張り色迄で注意して配合  
 いたします例えは壁の色が青色であれば無論敷物懸布迄  
 で同青とする印色であれは印色乃至印色に移りの良ひ  
 色合を配合されますので十室に入て感じ好い心が  
 おしますす其他の装飾子ありますると銅器漆器磁器の種  
 々ある器物花鏡金銀細工さては造花等を位置よく排列  
 して置きまして持つ居る従ての物を平常装置しある  
 のぞきま日本人の目から視ますると頗る奇麗に相違



ありませんが何んが新工場で臨時に左様で  
 本のお産敷見た様は酒浦田雅と云ふ氣韻に乏しい様は  
 思はれず

間取方 先づ家の重なる分は客室即ち意接する室食堂

常設室寢室浴室読書室植木室料理室であります勿論大

小は存りまして常任室と使用致したり植木室

のふい家もありますすが何れの家でも客室食堂寢室浴

室料理室は大ヤとも入れられとあります少し

く間敷の多き家では朝食及火煮餐の食堂とテラスの

中庭も食堂と二個室を設けあるものもあります少し

で客室は家の前方出入り近く設け寢室と浴室とを隣



らせ食堂と料理室とを接せしめまゝに不便を感じない  
 様ふつて居ります

今此等米国の室内装飾と欧羅巴のと比較致しますと流石  
 富有なる米国の大いありまして米国の二方が数等立ち優て  
 之派手見えます従て装置品の高價の物も多い様に見へ  
 ます一例を挙げますそれは欧州では大概敷物でも度々  
 子鼠通を授けてありますか米国内は室内一杯敷物を  
 ありますむも近頃では経財上計りでよく衛生上即ち掃  
 き掃除の行き届く為め床を蠟研ぎしむし必要  
 な處のみの敷物を換げたり家もある様です成程軒下  
 室一面敷物をしたのには引き剥がすて毎々掃除は出



来ませんが唯だ換気の敷たる分は何時でも取り除けま  
 して窓外子持ち出し充分掃除を致します事が出来ますので  
 衛生土室内と清潔に取すこと云ふ点に於きましては此の  
 方が便利と考へられます  
 暖室仕掛 大概の住家先づ中以上の家には暖室のた  
 めに蒸気釜が備へられてありますと同時に各室とも互斯  
 或は薪炭を燃やして温むる設けがしてあります此れと  
 同時に暖室常湯が出る様の互斯釜が備へられてあります  
 またから夜中でも屋中でも必要の時は入浴なり顔を洗  
 ふなり隨意に湯を浴する事が出来るのであります  
 暖室の暖台 西洋人の生活の中で最も大切よく愉快に感



せられまするのには女の寢台であります目土等のベッ  
 トは多く真鍮又は鉄材を用ひて造られてありますので  
 せかくと光輝を放ちまして佛壇でも臨んだ様奇麗で  
 ありますのみならず下敷には澤山の毛や綿等を入れま  
 して浮（浮）と致しますから寢心地のよき事はとて月  
 本の蒲團をぞとは比較になりません試み其候を調べて  
 視ますると寢台が米袋百五十弗より二百弗其上の置  
 く鋼鉄製のスプリング（彈簧）が二十弗より九五弗又其  
 上は敷くマトレスが極上等の致しますと柔かき毛斗り  
 の物で八十弗から百弗でありますから難儀夫婦寢の一  
 台が先づ二百五十弗内外となりますます此れは此外蒲団や



ら寝物やう枕やらで少ふくとも三百帛で日本の云々  
 と云ふ勘定になりまふ其枕は日本のものとは大に  
 相違がありまして長方形の袋の中へ柔き鳥毛を入  
 れてありますから頸を枕に附けますと顔まで埋まる位  
 厚くあります  
 便利と此処で西洋婦人の臥寝の模様を鳥渡申します  
 寝ます時は寝衣一枚になりまして髪は解きますので  
 うまれをすから斯る枕に頸を埋めましても差支へない  
 のでありますか若し是れが日本の婦人に教しますと此  
 種や高島田子急入子一時間余も費やして結ひ上げた髪  
 で此の西洋枕に就きましてたならそれこそ直振壊れて台



一、二あります。便所です。然るに西洋の方は毎朝起後  
 自分で洗ひますと申すより、枕より曲がまゝで髪針(ヘアピン)  
 十数本で梳好の形に造りますので何の造作もないので  
 あります。当国にも髪洗女も居ります。が日本の暖炕と異  
 なりまして髪毛の癖を直すとか髪を洗ふとか縮らかす  
 とか或は頸部を按摩をするとかに仕事であります。  
 浴室、便所 前申上げました通り浴室は寢室に隣りて  
 設けられ便所も此の浴室の一部にあります。又洗面所  
 も同様であります。既に温湯を何時にも流るゝ仕掛  
 けのありますので、すから一方の螺旋は冷たい水が流  
 過湯水で又又一方の螺旋は冷水が流れますので



自由自在の湯の加減が出来るのです流し終りたらば栓  
 を降せばほ水は鉄管を傳ふて水溝に入る云ふ所けで  
 す便所も同様匠師の必要はありませんが是れ又一個  
 の鎖繩或は横幹或は鉛を押しは用便所の汚物は悉く下  
 水溝に落ちまして何等の臭気もありません時折新築の  
 日本人が此の便所で顔を見ふなどの失敗談あるは適に  
 此を其清潔さが想像せらるゝ所であります便所の附  
 属と教しまして申上置きたるは西洋人殊に婦人は寢巻  
 姿や其他チヤノト着服しない処を人目の觸れしむる事  
 嫌ふのでして体裁を注意するところは實に周到なるも  
 のです日本の様子流し元や掾先で寢枕の顔上げ揚るを咬



多くは簡算の方です中餐は是れ亦た輕少のものであり  
 ます多くは前日の残物を應用するかニ之片の生肉を用  
 ひ此れは二三種の野菜と加へ生菓乾菓菓子などにて併  
 ましまた晚餐にありますると先づ最初スーッ。サダ。奥  
 肉馬肉獸肉三四種の野菜と茶或はコーヒー牛乳酒類  
 菓物水ナリ。ハ焼糖餅等であります勿論貧富と東家の  
 有無によりまして大抵相違はありますが見る所此の  
 晚餐を以て一家團樂の幸福と供とする機会として重要  
 視しますそので身上の裝飾は申すまでもなく食卓に入り  
 来る何れも髪を整へ衣を正し殊に婦人は朝昼晩と衣類  
 と着し換へますので此の晚餐の時には盛装を致します一



家尊を繞で着席致しまし、それから食事は始まりますが此  
 の食事半の禮笑あるものが一家團圓の睦み濃かるる  
 園であります我國の程子陽隅に牛が食します様無言  
 無声独り舌を鳴らすの音のみある殺風景のとは月齋の  
 差であります妻などが幼を頃食事中にこの物語を致し  
 まし、ても父母の行儀が悪いなど、叱られまし、左のとは  
 大違ひであります、其卓上の禮語は如何なるもので  
 あるかと申しますると波して人様の噂や殊に其欠点な  
 どを彼れ是れ極み上せする様の事は賤しむべき事  
 としてあります新聞雜誌など子ありまし、た滑稽話やら  
 其のの浮世話當り障りのない人として顧を瞬かし、と



る様にもうであります——牛直似に直似面白可笑しく  
 中を振て詰り合ふのであります故に食事時間は一時肉  
 半以上を費すのであります鳥渡晩餐の献立を見ます  
 と一度の斯様な沢山の食物が食べられるものであらう  
 か西洋人の胃腸は餘程日本人よりは大きい牛か馬か豚  
 でも左様な食べまひなどとは考へられますけれども  
 雨り朝昼の食事は至極軽少でありますし——胃腸の  
 重荷を負せて頭脳の働きを障害し鈍ります様の食物を取  
 るのであります勿論労働等を為す者は格別であります  
 すが普通の人は常にお腹を空かせて置きますのですそ  
 ぶして晩餐の時沢山の自分の嗜好物を撰らんで二時



計り掛りまして決意の同じ食しますから實際は豚とま  
 どまへらなくとも随分沢山食べられますが、  
 ねじます尚ほ日二三度の食事時刻は盡く一定せられ  
 居りますの衛生と必要の事と存じますのみならず西  
 洋人の起居寢食職務時刻等まづ一定して居りますか  
 ら何事も時計の指針と對應して起居するのであります  
 此の平常起居の規律ある一点は妾等の女子學ぶべき重  
 要な長所と存じます西洋のタイムイズマネー等は即ち  
 金と申しますのは價值ある言葉と信じます  
 金庫の清掃、市街の通り、外国では靴の俵屋に入り来  
 りますので縦へ靴拭は入れに備へありますとも靴子固



暑熱し暑い土などは容易に室内に運ばれるのです  
 から室内は不潔になり勝ちであります殊に子供などの  
 ある家はそれは格別不潔になりますとりわき奇麗な殿  
 内が敷くありますから日本の畳は左程に目立ちぬ  
 程で少し藁埃があれば非常に見ゆるのであり  
 ますかう家の掃除は努めて注意しなければならむので  
 ありますそれ毎週一回は必ず各室とも掃除を致す事  
 予定ですつて居ります特に寢室浴室は毎週一度づつ食堂  
 は日ごとの度料理室も同様でありますかゝ埃一つ落ちて  
 は居らんのです日本人は潔癖と申しますすが何々西洋で  
 も此は我々の劣る所ではありますせん潔癖と申します



と浴室の部に置き添ひ置き置けども蓋子一寸西  
 洋人の入浴の事を置き加へます西洋人は湯浴は一週一  
 度位でありますすが毎朝冷水浴を取るか或は冷水で身体  
 を拭ひ清めますのであらに一週一度或は二度着し女し  
 ども汗疹等の事あれば其都度観衣と上下とも取換へま  
 すので身軀は非常な清潔にし居ます身軀が清潔で  
 も皮膚病に着くる下着が不潔では何の効用もない事と信  
 じます寧ろ不潔に陥り易いのであります我か国では  
 毎晩の様に湯に入りますけ共下着の取り換へは入  
 浴程に教さふい様と思はれます是れで折角の入湯も餘  
 り効用がふいのでありますから可成下着は要々取換



洗滌を仰ぐこととありまして、年々雨も山脚互様、皺れ茶お婆さんおはあたくし、おる。

へたいものです或る説よりますと候り入浴致します  
 と年老へて顔に小皺が寄るなどと申しますが事実かと  
 も思はれますのは西洋には本国見た様子恐ろしく小  
 皺のある老人を見交くる事が稀であります生理上如何  
 のものであるは存じませんか、此は其道の先生様子就て  
 洗滌は毎週一度日曜日に定められ居ります其家々  
 よりまして家内にて洗滌致す家もありまして又左院  
 権屋に全部洗ひ出す家もあります常備の俵用子に洗  
 はせるか特別に洗滌のため日傭人を呼びまするか左も  
 ちんば中華以下の家では家人が洗ひのであります洗滌  
 物の種類は随分沢山ありまして先づ第一に寢居の敷布。

オホ、



枕蓆。下着。手拭。手巾。食卓蓆。に布。シャツ。寝巻。其他婦人の白  
 子袴。これは<sup>704</sup>フットとカして下へはき<sup>705</sup>黒き物。襦物等の衣服等であ  
 ります。それでは品数は沢山あります。から家内にて洗濯  
 するものは、これ相應の設備が必要であります。して本国の様  
 子~~は~~盥の中では、バヤ、く、左どと牛糞を洗い洗ひ方では、間々  
 含みません。洗ふ子は洗ふ器械を用ひ絞る子は絞る器械  
 又た白き物は、洗つてフー、或はソーダ、ライム等を溶解さ  
 せました。熱湯の中煮るのであります。から真白くなりま  
 す。丈夫で干し上げましたら、靴。下牛巾まで一々火熨て、拭  
 けます。その金、新らしい物同様着用に使用する。毀れな  
 ります。と、誠心、持が、宜しいのであります。本国など子



ても今少し洗濯といふ事、重きを置き身体の清潔と共に  
 衣類の清潔を計りたいものとする。此の一事は妾  
 等婦人の最も心得努むべき仕事と信じます。十数年前より  
 洗濯し、洗濯し、在田同胞として洗濯業を開始せるもの、快  
 山ありまして白人同業者と対抗し、或はそれ以上の活動  
 され、居ります。何れも、華に、蒸気機関を、掘へ、附け、まゝして  
 一、何の、産、を、管、業、と、あり、ます。市中洗濯物を、集配、し  
 ます。これは馬車、或は自動車、を用ひ、まして、国、内外、一定の、時  
 日、に、集配、し、ます。只、だ、客、に、注意、す、べき、点、を、申、す、水、は、  
 市中の洗濯屋、に、衣類、を、送り、ます。すると、餘り、ライ、ム、を、用ひ、  
 ます。う、で、地、質、が、一、年、或は、半、年、位、まゝ、して、弱、く、な、り、裂、け、破、



水ますのです。それ水四ヶ條より上等下は洗濯屋に送らざし  
て家人或は使用人にて洗ふ事であります。

僱婢 僱人

僱傭 僱傭

僱婢 僱人

中等生流の家庭に於きましては何れも傭人

を置きます。先づ才一必要なるは料理人兼掃除役であり

ます。料理人は料理一切を司とり、掃除は次で老女掃除に

任じます。又左家後多き家にては料理人は料理専門と改

し、そして外掃除給仕等と爲さしむる下婢を置きます。中

等以上上等の家にては悉く専門と爲ります。料理掃除

洗濯給仕庭園司を雇ひ更に上等家庭に多ります。と

此の~~外~~外に侍重侍女等と雇ひます。で家族の人数より



は傭人の方が多数と云ふ音親を呈しますのです今更  
 料の割合も調べますと料理人が二十五弗以上五六十弗  
 掃除給<sup>け</sup>人が二十五弗以上三十弗侍童侍女は其服装を音  
 麗に教し主人主婦と同行すべき筈のものでありますか  
 ら其給料も従て多く拂ひますので二十弗以上百弗位ま  
 でありまう庭園司は普通四十弗位であります其の外  
 上等の家ではハウスキーパー司配人乳見のある家では  
 祿母を置くなど平民国を以て住んで居る当国の上等生  
 活は其実貴族的な生活をして居るのであります常位を  
 く門閥なき当国の事でありまうから金さへあれば如何  
 なる家構へも如何なる贅障蒙るものと競ひまうても勝手



次で況して現代の世界は縦令帝位内閣ある国よとも金  
 は即ち権力りの風潮陥々として防ぐは由もなく強んど  
 抑止する所を知りません有様であります善方やら悪方やら  
 左れば当国よて一家三人或は四人の家族よて二人或は  
 三人の雇傭人を置きます家の一月の経費何程位ひで  
 あるかと申しますと互斯代水代食料品給料新聞代洗濯  
 代等を合算致しますと中等生活に於て二百二十弗より  
 二百五十弗は足れとも必要であります其の外交障費  
 や寄附金や衣服調度旅行費は別途に入用な次第であり  
 ますから少くとも二百五十弗位の出費を必要と致しま  
 すのです



家計の収支  
 何れの家でも一家の総経費は主人より  
 一ヶ月何程と一定したる金額を主婦が支取りまゝ左と  
 諸支拂を為すのであります尤も其金額は主婦と主人と  
 の談合に依り決定するのです此共決して実費支払ひ  
 見立様を極く切り詰めます一た計算ではありませぬ普通  
 二百弗で済む延は二百五十弗位は主人より渡すのです  
 ら主婦は毎月五十弗とか三十弗とか割除金はあるだけ  
 であります斯る次でありますから主婦は常々一家の  
 経費に注意を拂ひまして一文でも多く割除金を得様と  
 改すのです此の割除金は新流行の衣服代にもなり小遣  
 にもなり交際費にもなり旅行費にもなり裁指寄附の金



にもなる改訂であります

概観致しまして其生活振りが整潔なのは勿論ですけれども

其多量の消費すべき点と常規でないところなりですそれは

何れかと申すと無駄遣ひとか使用せらるべき品物と致

棄つるとか云ふ点がないのであります麻細利用とまで

行かなくとも各箇の棄ては舞ふ事とせらるのであります

主要な日本人の月より視ますと立派なるレレ井一であ

りながら斯る銀細の事をまで注意せざるとは想ひ難い

節がありますです日本流の奮揚なる処高尚なる処なく

して下鄙子或は各箇の見ゆる様です金銀の権の本流本

元なる当分の事でありまうから金銭上の関はる事は一



重一毛も軽々に見越せず極めて嚴重に細密に互ります  
 實際日本なるとしては其人の品格に關すると思ふ事でも  
 何の憚らず無頓着にやるのでありますこれで見ますと  
 貧乏は致しませんが日本としては貴族的優雅の血  
 脈がまだ毒害の内に流れ居る事を覚ゆるのであります  
 公私財産 清義知の如く西洋としては財産なるものは目  
 本の如く家子屬を養世せずして人子屬して居ります故に  
 主人は主人の財産あり主婦は主婦の財産がありま  
 す。又、主から親子夫婦間と虽も自分の財産は自分の財  
 産として死す迄は自分で處理するものであります良人も



銀行の預金して居ります妻君も預金して居ります  
です我國の制度習慣から見ますと餘り二分の陽がある  
振でありますけれども家族本位でなく個人本位から  
来りたる規定でありますので斯る有様でありますか  
ら譬えば兄弟とか従兄弟とか伯叔父母とか甚しきは父  
母とかは自分の許可は兄弟等の家と特別の事情なく  
て逗留する様な事がありますとすれば奥逗留者は自分  
の経費を何程と定めて支拂を致すのです我々日本  
人から見ますと何んがが氣不味く他人行儀に餘り  
ます各人各人が自己の財産を所有して居ると云ふ点か  
ら考へますと至当なる仕方と存じますのであります

此逗留する家の貧富より由り逗留する人の貧富も由りますし  
世に事がありますとた一週月々をこの一寸見舞金等の逗留料と云ふ  
法を考へておられる様です

（一）此逗留する家の貧富より由り逗留する人の貧富も由りますし  
世に事がありますとた一週月々をこの一寸見舞金等の逗留料と云ふ  
法を考へておられる様です



夫の私有財産の事と就きまして財産分配の事を申上り  
 すれば今父なり母なりが死亡致しましたといたします  
 と父なり母なりの財産分配の遺言あれば遺言に基づきま  
 しと親近者と夫婦と分配しまたは遺言がありません時  
 は親族会子親と夫婦と分配し又はそれと夫の方配  
 は父にすれば先づ其妻たる人が全部若くは半方を与け  
 取り残余を子供と分配するのでして子供の差別はなく  
 個人々が私其娘たる者が未婚既婚とも関係せないので  
 ありますす夫の結果と政しまして個人々が私有の財産を  
 存する事とあります日本ではお嫁子行くには財産と  
 しては私親戚並呉儀たまた持産金を持て行く者もあり



# 目子女の家庭教育

家庭の整理は直ち子<sup>女</sup>教育の大關係に及ぼしますのは  
 無論の事であります西洋の如く何事も規則正し  
 く整頓せられありまする家庭に於ける子女の教育は日  
 本の如く不整頓ある不規律ある家庭に於て子女を教育  
 するより甚だ容易と思われ  
 親女教育を陳べまする前に一言を括みたいのは子供の  
 玩具であります日本在来の玩具はヒリ／＼かう／＼と云ふ  
 様な何等意味のない品物でありますけ建共西洋の如  
 く玩具其物は直に子女の智識啓蒙に資する様子作つてあ  
 ります日本でも其頃は充分西洋玩具の精神を採りし



た	る	玩	具	を	作	る	様	な	つ	如	居	り	ま	う	様	で	す	け	は	共	ま	だ	
中	く	西洋	の	それ	に	及	び	ま	せ	る	玩	具	製	造	者	は	今	一	と	息			
の	法	舊	染	を	教	は	し	く	存	じ	ま	す	其	の	玩	具	の	既	荒	も	大	に	笑
と	居	る	事	と	信	じ	お	れ	ま	す													
信	て	是	水	より	子	女	家	庭	教	育	の	一	般	を	中	上	ま	す	が	欧	米	に	
て	は	先	づ	子	供	に	教	育	す	る	に	お	り	ま	す	と	最	初	子	供	が	極	く
幼	少	の	次	は	目	を	剥	き	出	し	て	睨	み	附	け	たり	大	声	を	張	し	て	
叱	り	附	け	たり	取	り	ま	せ	ん	の	み	を	ら	ず	日	常	の	遊	戯	か	ら	起	
居	動	作	を	ど	も	可	ぬ	其	意	に	逆	ら	は	ぬ	様	教	し	ま	し	て	出	来	候
る	限	り	子	供	を	天	来	の	俗	に	育	て	ま	す	子	供	の	長	ず	る	に	従	ひ
し	し	て	前	陳	の	種	々	を	刊	登	あ	る	玩	具	を	共	に	ま	す	る	と	同	

小供の習識と



△牛乳ですから分量は~~決ま~~時刻を一定するに於て容易であります。左様にして  
 6ヶ月頃までは母乳は嬰兒用として特別の注意を要する。その母乳を搾り出す

時	2	段	々	と	規	律	を	立	て	ま	し	て	其	の	規	律	に	慣	れ	る	様	子	仕
向	ま	す	壁	は	朝	起	層	夜	寝	等	の	妙	き	事	を	時	刻	を	一	定	す	る	
の	で	あ	り	ま	す	西	洋	の	乳	児	は	母	親	子	抱	か	れ	て	寝	ま	せ	ん	出
生	後	一	ま	し	て	か	く	別	の	小	さ	る	寢	食	或	は	籠	の	妙	々	物	の	内
に	就	寝	せ	し	て	る	の	で	あ	り	ま	す	を	も	母	乳	を	用	ひ	ま	せ	ん	で
牛	乳	を	飲	ま	せ	ま	す	直	に	あ	り	ま	せ	る	一	は	お	可	定	し	き	は	西
洋	で	は	六	十	の	お	親	爺	さん	が	こ	つ	四	つ	の	子	供	と	遊	戯	し	て	
居	る	事	で	す	其	は	全	く	兒	童	と	同	化	し	て	遊	戯	を	供	に	する	の	
で	其	の	遊	戯	の	間	に	教	育	の	で	あ	り	ま	す	決	して	我	同	の	如		
く	親	と	恐	怖	せ	し	て	る	様	の	事	を	教	へ	ま	せ	ん	日	本	で	は	父	は
物	を	べ	き	も	の	母	は	親	し	て	べ	き	も	つ	と	定	ま	つ	て	居	る	様	で

△それでは子供達は就寝の時間がありますと母親の一言の申掛けで眠るものらしいが  
 皆おっぱいの子で乾くものではありません



すけれ其西洋では之れが及ぶであります初の程でその小  
 供の気嫌を取りつゝ、意てますもの、さて最子と云ふと  
 ありますと幾々規律が失へ同敷なりました左様致しまし  
 て其等の規律は皆母親より子供に命令し厳守せしむる  
 のでありますして子女の家庭教育の全部は母親の爲すべ  
 きものとなつて居るのであります決して良人の半を藉  
 る様の事が無いのです斯様の凡でありますからお褒美  
 も責罰も皆な母親がなす限ですから却て母親を仰る  
 事になりまして父親は朝食後まぬく出勤致して日中は不  
 在で午後五時から六時夕餐前の暇致しますから子供と  
 接する時間が多くありません従て父親は子供を可愛が



る事が深い伏でありませう。それで西洋では子供が徒らに  
 しますとお母さん云ひ附けませうと申す味しとお  
 父さん告げますとは申しませう。子供はお母さん云  
 はるゝと何事を為し居りましても直ちに中止し  
 すゝです之を要します。西洋では子供に規律義務責任  
 と申す振ふ重要な習慣性を涵養する事。努めますので  
 餘り鍛錬する事はハルテ敷申さふいので、其の規律と  
 義務責任の威令を幼少の頃より吹き込ませます結果とな  
 しまして、<sup>活治</sup>自強独立と云ふ精神が自<sup>然</sup>に業起するのであ  
 りませう。それから子供の間食と此の事は西洋で例日本  
 と同じで何りますすが、大概午前三時頃から四時迄の



ありまゝにて其の同食は枵めて放埒不致し方にて子供は中  
 らく食料を握りまゝにて飛び廻りながら家の内外に回せ  
 ず食するのてあります日本なれば不行儀と思はれまゝ  
 が西洋では路を歩きたがら食する事を餘り不行儀と  
 も思ひぬ様であります飾し斯る細事は年長するに従ひ  
 まゝにて自然自覚教しますので取り立てハハ同敷申す必  
 要もないのであります我同子では学校より戻りまゝにて  
 から徳習のふんのと申附りますが当国では別に左様の  
 事と申附りませんで十一二才頃迄は退校後は急遽分  
 り様ばせなくのてありますまゝ是れは未だ充分発達して  
 居りません頭脳と器用さませません為です勿論十五六才



2もなりますと自分で登用なり社内なり修習する様  
 2なりますのでありますから児童時代を終了して  
 は急りなく登壇即ちあして翌日の授業を終りさへすれ  
 ば買一いにと改すのでありますむも家庭内の仕事と取し  
 ましそ子供は極く軽少なる仕事を毎日朝或は夕方勤ま  
 する様存じますす程各は前所を第1とか側面を第2とか  
 難を回避するとかの仕事であります流石本因は自信独  
 の国でありますから幼少の頃より働きの貴重なる事を  
 知覚せしむる方でありませう  
 それから今一ツ当分の子供には金錢の貴重なる事貯蓄  
 心持蓄成する事金を儲くる事職業を覚ゆる事などの感







まして要しく申さばクツキ金の様ふものでありまう言  
 葉を換へて申しますと惚れを惚れまゝで双方の愛情  
 の上子成立するのであります一言にして申さば相愛の  
 結果として夫婦になつてであります情理から申します  
 と斯る相愛の結果夫婦になりましてたのでありますから  
 離婚などと思はしき出来事は無い筈であります其  
 實際當時に於きまして離婚の訴訟沙汰や夫婦別居など  
 の事實は日本よりも多い様です其の現象には何故理由  
 が有からぬばかりなれば事と信じてまう世界交通の便開けま  
 して以来東洋界は縮小せられまゝた米を国境を撤する迄  
 この進境を達しませんけ共金錢貨物に就きましては



関税をる門戸を役けありまするのみで在る萬國境界は  
 ないのであります従ひま——て生存競争の劇甚なる事は  
 文明進歩と正比例を為し——て居るのであります夫の  
 生存競争の猛烈なる波動は人生の全般に影響を及ぼし  
 ますので結婚の上にも夫の波動は遁水ない事でありま  
 す故に自由結婚則ち相愛の上で成立するべき結婚あり  
 りますので今日では日本は素より西洋諸國に比し  
 しても愛性以外の或る他の條件を必要とする事となり  
 ます竊かに當代の存様を考へて見ますると十中の八九  
 は妻たるべき或は夫たるべき家の社会上の地位勢力財  
 産と云ふものと結婚の第一重要條件と云ふくらも懸案と



正し 容白才学を才ニと返しより最も尊重すべき品性  
 の如きは強んで度外視せられ居るやと信せられまする  
 正し 妾の信ずる神聖なる結婚と申しますのは愛情以外  
 他の意味を含みまゝとは神聖とは申されまゝと信じま  
 す 若し 地位とか財産とか才学容白とかを結婚の腹案に  
 画きその結婚は全強り貞節位財産等と結婚おします  
 ので人と人との結婚ではないのです 斯る不神聖なる腹  
 案の上で成るゝました夫婦は変へて永久不愛の因縁な  
 る家庭を持續する事は困難と思はるゝのです 何故を此  
 は若し 不幸に―と一旦其腹案中の一点が失われまする  
 の事要に際会な―ましたらあら直ちに夫婦間の愛情に意



化を来すからで、今一例を挙る。上らる事業の失敗  
 して無一物をなつたとか二階からお墜ちて妻君が鼻を  
 無くなつたとかの事業が起りましたと云ふ。然るに  
 産密具を腰栗の酒して洗滌した夫婦でありませぬ必  
 然夫婦同の田舎を失ふ道理と信ずるのです。それでは不圖  
 想ひ除にまするのは、故承知でもありませうが、俗歌に淫  
 山の奥の奥奥の竹の柱の茅の屋根云々とあります。が、果  
 俗と云へば云へませう。けれ、是は實際の極致で夫婦同  
 の関係は斯くなく、これは叶はぬ事と思ふ。この分断の  
 妻の意識は、修り極端の理想を立上げ、左様はありま  
 す。が、若し去来をく人は斯う夫婦が理想として望み、い



の	で	あ	り	ま	す	何	一	ち	が	は	彼	の	爵	位	財	産	才	学	客	白	雪	が	又	
あ	の	壹	帳	を	誘	起	す	べ	き	原	因	と	な	ら	な	い	と	は	申	し	ま	せ	ん	
け	進	走	斯	の	壹	帳	は	極	め	て	薄	弱	の	も	の	左	の	事	は	確	か	と	信	
し	ま	す																						
こ	上	の	次	で	あ	り	ま	す	か	ら	自	由	結	婚	を	申	あ	が	う	知	る			
の	條	件	が	包	ま	れ	ん	る	條	婚	を	あ	り	ま	す	一	て	從	て	舊	婚	の	不	幸
の	陷	る	事	も	多	い	う	み	あ	ら	ず	他	の	理	由	と	は	し	ま	す	一	て	は	女
尊	男	軍	の	同	格	で	あ	り	ま	す	か	ら	女	子	は	男	子	を	屁	と	も	思	は	
す	女	子	の	鼻	息	が	荒	れ	牛	の	様	で	あ	り	ま	す	近	より	女	子	の			
不	能	合	不	体	裁	不	行	届	き	が	良	人	の	二	方	に	在	る	と	二	方	次	に	は
席	婚	を	言	ひ	出	す	の	一	て	す	更	ら	に	お	こ	の	理	由	と	は	一	つ	一	つ

申すまでもあること

△甚だきは良人を屈服せしむる一つの武器とありまして脅喝的の結婚するぞと申すので頗る耳障りの事であります



は離婚は重なる女子の方より出すのが其の離婚に依  
る。又許可のお金を良人より受け取る事になるの習慣を  
不法徒の宣告があるの時として其のお金を得る月  
的の下最初結婚し次の離婚をする様だ。不平等な事だ。  
1とあるので、それでは如何なるものが勸戒になるか。又  
この愛情が誘起される。まゝ左の如く夫婦となる迄  
この愛情が起りまゝ。一旦夫婦になりまゝ左の上は其の  
愛情を永久に持続せしめる事は家庭の最も重要な事  
福の源泉と存します。この事皆さん味方志の通り人世の  
行跡は崎嶇百端山あり川あり不時の災難失敗もあるが  
必ずしも一生を競争の猛烈なる今日に於きまゝしては  
可なり。

提  
取  
寺



日は義衣義食駒馬を走せたり人にも今日は終れ其の生活  
 にも困る様な不幸の遭遇する事は日常毒等の見聞する  
 事實でありますおの悲愴なる境遇の處にまゝても夫婦  
 間の愛情は何等の変化を来たさず舊に依て増々相愛相  
 憐の愛情を燃やしますこそ眞の夫婦神聖なる結婚の結  
 果とこそ申すべく彼の俗歌の眞意は即ち其處にと信じて  
 ますのていす  
 此れはこゝろ結婚の次第を申述る此に不覚後悔ありを  
 る單見を陳じまして相憐をさせん諸姉妹の情見通しを  
 預ひたりていすのていす  
 備へ前に申述べまゝに通り自由結婚の次第でありま



すが西洋の言葉に愛せざる處に  
 婚すれば婚せざる處に  
 意とあります換言しますれば  
 愛情なくして結婚はす  
 者は同夫や色女を振らへると云ふのです更らに反言す  
 れば結婚の基礎は愛情でありと申すのです  
 此承知の通り米國では男女の交際は何子憚りなく行  
 はれり方日本の極に男女席を回ふこともなとの寢寢する  
 隔てはないのであります或る男子が一女子を見り  
 て感想するとはいますと奥子女を識れる男子或は婦人  
 の依て紹介して貰ひまして其の娘さんと交際を求めま  
 す交際ねす事になりまして此は男子の方より訪問を致し  
 ます女子の方から男子を訪問する極の事はないのです



夫れから段々親密になりまうと相携へて芝居の山遊  
 びの行きまう双方共互に其氣心も知れあへて互に其  
 人なるばと云ふ愛情と希望とが起りまへて時機を見計  
 らしめて初めて愛の男の方より婚約を申し事あり  
 ます婚約成るの時は親戚知友と会へて披露を改しま  
 す其の婚約の前よりありまへては中等以上の家庭に就ば  
 芝居見物等の場合には娘の友達なり母親なりが同行す  
 る様になつて居ります婚約成る所は好いた同志が牛子  
 牛と執て世間憚る事あり二人で横行活歩と云ふ伏し  
 込みし其の婚約成るの時は男より指環を贈りまし  
 て其証拠と江戸で寸分婚約成る已前より旅交ありは



の  
田  
子

二三の男子が其の娘さん、市井にあつて来訪するだけ  
 決して一人に限りますせん男の方でも撰擇し撰擇を重  
 す通り女の方でも同様で中原の鹿果——誰れの牛子落  
 るかは疑問中の疑問  
 女子から結婚を申し込まない事ゝなつて居りますけ  
 共目か、口程の物を言ふと申す事もある計りではありま  
 せん女子が其男と結婚したいと焦れ居れば男も——そ  
 申込む様は仕向ける訳です御々輕々子申込と——そ  
 ぬられろは男が赤愧を擡ぐ彼がすから男の方も確定と  
 認めなければ忽ち申込を——ふいですそれで又子  
 一の相談があります男の方が今申込を——やうかと機



唐も寝て居る女の方は早く遠慮なく申上をすれば好む  
 と思ふところかまだ其機会を伺ないで躊躇して居る其  
 時女の方から所題を掲げて司馬郎の御座は何か何と云  
 で能くうゝ密帳して居りますね一体どうも其所附けねばすつては  
 正と伺を覚する男の方は機失ふべからずと心は宙に飛  
 びまわつたりでもじつと鎮めて落着拂ひ致を撫でつゝイ  
 ヤ何とも整頓して居るませんが唯ぞ愛の一つの不足の  
 ものがあつたのですと云ゆる女の方は何と知らぬ顔  
 してマッパいあふふの綺麗な赤お住子何がお不足で居る  
 うのですと伺ひ返す其処に於て男の方では千歳の一遇  
 此の機を失しては再び申上この機会あるべくも想はれ



ませんから實は私の家はまだ大事に私の妻がありま  
 せんので若し貴嬢が何同意下さるゝ水は貴嬢と結婚を  
 願ひたいのでは成ります何卒お賛成下さるゝ此もす  
 ばいですと云ふ塩梅式に行くのです何んと面白いは  
 ありませんか  
 それで其の申込に對して女子の方で承諾しますと  
 双方の両親の承諾を得ますのですが威多の両親は  
 異議を提出様の事はありますせん疑ひなく私も所  
 の兩人さへ確であるが多少の誤差はありましても結  
 婚は結婚する事になります是れ自由結婚の自由結  
 婚と致しまして此の婚約後正式の結婚に至る迄の時



は通例短くは半年次体長さは一二年であります。が異例  
とぬ――ま――五十年の長年月を婚姻の俤強造する事  
もあるのです。又た此の婚姻は双方の一方に於て愛情の  
變化消滅或は愛情の消滅で――ある。此き事情の発生せな  
い限りは破約はす様の事はふいひです。  
是れより愈々結婚と相成ります。と教会堂に於て牧師の  
主宰の下に挙行するのであります。式場には父母親戚親  
友などが定會所に――ま――式の後ち牧師は新郎  
新婦の握手せしめつゝ、結婚の指環を新婦に嵌めしめ左  
の如き質問を双方に發するのです。痼疾破産其他如何な  
る災難あると。此の婦人を妻とし、保護する心であります。



ますか婦人の親も同様女の男子と夫として従ひ仕  
 事する心でありませうかと云ふ類にありませう  
 然りと著るのてありませう女尊男卑の同とは申しな  
 が結婚式の誓詞は夫婦は互に夫は保護者事は随従者と定め  
 られてある様ですそれでは宗教には男尊女卑と云ふ誤で  
 ありませう  
 結婚式後は新郎新婦は多年の希望成就して蜜の妙き所  
 結婚行と洒落れる事となるのです妾は未だ斯る慶福  
 には接しな事はありませんけり其宛角相愛の兩人が午  
 子を執て進れ憚らず天下晴れこの夫婦とならな周際  
 の新婚旅行其愉快さは想像の外でありませう其の旅行



から取りあ—て新家庭を整備—ま—て二人が互人例と  
 なり朋友知人と迎接する事になりますので所謂国民と  
 しこの而も完全なる一国民としこの資格と責任とが備  
 はるべきであります  
 信義の通り日本では男女双方が去来して居ても両親が  
 承諾しなけりば先づ結婚は成さぬ—ませぬ西洋思想か  
 ら申しますと随分厭制にも感ぜられますが西洋の例  
 人本位と日本の家族本位との異なりまする点と基きま  
 し左の二同時二點たるものが自らの子女の幸福安寧を  
 希みまする点よりば—ま—て親の同意必ずしも無理で  
 はなからうと概せられまふ次の所謂ハイカラ青年諸



君や西洋思想の心酔せられまゝに海老基式部方は恋愛  
 神聖とか自由結婚など主張せられますけれども現今の  
 我國の形をまゝにすることは出来ぬのでは社会道徳と智  
 識とが發達して居らないのではあるまいかと案じられ  
 ます去ればと申しまして男女一生涯の運命の定まりま  
 する一生一度の結婚を僅か一週や二日の見合位で輕々  
 決定いたしますのは又又人の度量を要する事と存じます  
 兎も角も今日の以後の結婚方法は西洋を折衷いたし  
 まゝに適當なる方法と案出すべき時機を熟慮して一段  
 ると信じます其外猶ほ幾多事項がありますけれども其  
 議論めきますから中止と存じます



除事ではありまするが当地在留者の写真結婚の弊害は

今や属々として現れに居ります其原因を討ぬまうると

在来の男子が餘り誇大なる吹聴をなす故より

以上の上等王御人とせらるゝにあるのであります故

に在来者の求婚の難せられんとする一方は充分求婚者

の實際の身分地位に就て精査せらるゝ事は最も必要と

存じます是れはホンの老婦人等が中上を要する

日夫婦観

夫婦観をぞとやしましるも妾の如き未熟無学の者より

底其直想を窺ふ事も知る事も出来ませぬのであります

が妾の過去の事情を鑑みしる此の世間の夫婦の取



様は就きまゝにハ陣に注意を払ひまゝに決て其の目に  
 映じまゝにた点と申上をいふとありまゝ婦人側の妻が  
 観察するまゝに左の如くは一般の西洋の夫婦は親切い程  
 睦ましいのであります同時に西洋の婦人方は仕合せと思  
 ひまゝにたのです女尊男卑の風物に加へまゝに夫婦本位  
 とカチ切け携ておまけの相愛の夫婦にありまゝの如  
 味しむに思ひながらの如くあります寧ろ日本に旅来  
 まゝに押附け夫婦が西洋のは夫婦以上は円満に行きま  
 すのが奇異とばすふけとはなるぬ位のものです日本  
 としては妻君が良人の氣嫌氣棲を取るの如くが西洋では  
 良人の方で妻君の氣嫌と取るの如くす良人が妻に柔く



一、親切で誠實な事は到底日本などには夢にも見ら  
 れた様ではありません。婦大昭神と崇め奉つたりとて斯  
 らも「はありません女王陛下と掌揮」良人は女王の臣  
 下と云ふ格であります。去りながら妻君の方より良人は  
 利する忠實親切大事の教しをします事は家庭が上焉であ  
 るはある程日本の妻君と同じ様であります。から傍で見て居る  
 親切で良し尊敬し愛撫するのです。から傍で見て居る  
 一、と美しく思ひます。のです。左にばと申し、と斯う睦まじ  
 き理恵の所から帰計りと申す次第ではあります。む良人か  
 朝早く出勤はする。と不約知官も俱に教さぬ。い、で就寝と  
 一、と居る。方とあれば是れでも夫婦であるのかと思は



る、程氣位放散の妻君もあるのです。偏一人の方では  
 氣不味く悲ひましても、空しく、洞色子現さなれど、例の如  
 く、新妻の態度を以て妻君に接します。のですから存外、所  
 澤の妻君は氣平であると思ひます。  
 それで、西洋の佳夫婦の愛情を現はさねます。それが如  
 何にも露骨であり、まゝ、新郎新婦あるだけ、甚しいので  
 あります。此今、此處に其状態を申上ります。この社会全  
 的に、新妻は、すゝい、か、卑猥に陥りはすまい、か、と、批  
 評あります。日本婦人の、妾多し、まゝ、日本、の、姉妹、防  
 君、の、申上ります。とは、羞し、控へます。する、か、日本、婦人、の、特  
 徴、美、点、と、申、ベ、き、羞、耻、の、念、を、知、は、婦、人、と、見、受、け、ら、れ



90. 人二則ふた夫婦間の愛情を悼りて露骨に表はせしむる愧ぢらぬはあらまけん  
 常々語りと爲るを居られぬのであります

ませぬので、只だ一例と致し、まして申上座きまするの  
 は接吻であり、有り、新婚当時は一日の接吻数が二三十  
 回、一きは百回にも達する程との事であり、ますから其  
 他愛情を露出する仕打の如何なるべきかは、推想の由  
 来る事と存じます、むゆ日本をぞ、ても舅姑等の手前も  
 あり、ますし、憚りもあり、ますので、すが前や述べました通  
 り西洋では、は、叔等の憚るべき人も、法度ませんのです、か  
 ら露骨も、甚だしいので、あり、ませ、う、今仮りに日本の相愛の  
 新夫婦が、新家庭を造り、夫婦の外、誰れ憚る人もない、と、江  
 一、ました、なら、如何なる露骨の程度に進みますか、は、讀  
 諸君の、理想、に、仕、て、ま、せ、う、ま、の、想、定、に、あ、り、ま、す、と、以、



の愛情の露骨即ち双方共思ふ存分は愛情を顯はします  
 る為に西洋は夫婦間の愛情は新婚當時の愛情の連続は  
 餘り長期に跨りません。我同は夫婦の愛情は寧ろ永続  
 絶えず様々思ひをもち此れは我國では新婚當時よりぬ  
 方燃る思ひの愛情を羞恥の念で抑制します。時々少  
 しづゝ歎はします結果と存じます左は申しますが外見  
 から致しますと西洋の方は愛情の特權が爺さん婆さん  
 に至る迄で継続せられとある様であります。け共其實  
 其の愛情は兎に角新婚當時の青春の愛情の連続ではあ  
 りません。多くは習慣的或は礼儀的に愛情を顯はすか  
 の様な思ひをもちそれでは妾は愛情の露骨必ずしも不可



ありと思ひませんけ其れ々日本婦人は多居り其れ也  
 と思ひの方が宜しいと存じます然し所夫婦が燃るが如  
 く愛情を羞耻の金縛中へ包み込みまするのは慥かに愛  
 情を變化する所次で如何にも奥座かしく存せられます  
 目~~今~~では接吻の弊害を然る議論もありますか少くとも  
 夫婦間を放ける愛情の増進を表明する上は尤も新用を  
 しても断せられないと思ひます西洋では其の接吻が  
 一つの礼儀となつて居ります夫婦間を放るまゝでは  
 同様でありませう良人が外に出ず時船定所へまゝに居るは  
 必ず其妻君と接吻するのでありませう良人が外出或  
 は船定の時接吻をせざるとすれば良人の愛情を變化さ



起したる徴と仰いますか或は良人の心中に何か居た心  
 配の事件あるものと考へらるゝのでありますそれで良  
 人が外出の時通に接吻を怠れませんでした事もありますので  
 の時の妻君の顔は不平不満の面持ちでです良人は一歩戸  
 外へ出て不図思ひ附きまゝに再び接吻の左めを返さる  
 る事もあるやうですそれで妻は愛憎の悪化をなさる事を表明  
 する左めの礼儀的接吻と申しますやうです  
 社会上の地位ある良人のなりまゝと良妻君の條程の不  
 品行がありまゝにとも知らず識らぬ間に一と居りますの  
 は離婚の地獄なまゝの世間と露表せらるゝ事を耻辱とぬ  
 まする考へると利害関係と好由な事と信じますそれです



から西洋の夫婦間にも異議を面々くする事實もあるが  
 一に其内情を這入りますと姿一しく表面程楽しくも  
 面白くも立派でも幸福でもない点が幾許らもある様で  
 あります

島渡妾の耳に異様を響きます事は妻君が良人王時に  
 棄てし――まする事でありますじヨーじとかいりりと  
 か申す事ですそれでは自分以外の人を良人の名を申しま  
 すとはどう――何事と申します良人も亦た同様でござ  
 へ何某と申す事の我知とは正反對の次であります女  
 傳男傳或は男女同権の図でありますから各自の権利は  
 就きま――ては各一步も譲らないのですが大抵同様の



の程きまゝとも同様でありまゝ譬へば何よかの細事  
 付きまゝ一見人が家政上の事と容喙改りますると早速  
 妻君は此を角迄まゝてお前は相前のオフィスの事務  
 をセツくとお勤めなさい家政の事は私が切り盛りしま  
 すよぞと遣うにむるのであります家政上金銭は良人か  
 ら與へるもの石物です  
 斯く申述べますれば西洋の夫婦なるものは實際價值を  
 示す牌にも思はれますけし其各其責務を尽すと申し在か  
 う申ますれば至當の事と存じますそれでは妾は西洋の婦  
 女婦の美点とも信じてまゐる處を申上げますれば夫婦  
 互に各自の趣味嗜好の同情を寄すると云ふ点であります



す又左同様を寄せますと同時に出来入りの同化はさふ  
 と勤むる日ばかりです。譬へば妻君の観劇趣味は一つ  
 良人は自らいふ餘り好まなうとも事務所退けの暇に逢ふ  
 観劇券を買ひ求め来て妻君と興ふるとか或は園藝に興  
 味か深ければ珍奇の花草の種類とか植木とか或は園藝必  
 用なる道具とか買ひ求めまして妻君と花ばせたりで  
 す其他何はまれ互に同化を要務めまうので多少又  
 互に不快の感がありましては其の良人の一帯に依て終  
 りの邪念暗塊は一拂せられ行く所く青春時代に  
 の燃焼の愛情は代りるに風波なき円満なる幸福の家庭  
 が形成する、次でいあります我國夫婦間を於きまゝに



西洋の婦人前子は月坐の清丈婦の如くおんせんと云ふ様は澤山の御子供を持て居るを  
つは極めて稀れであります大概二人か三人多くて四人迄では普通であつます仕舞國△

も此の調和同化同情と申すものが今少し双方向に流れて  
 めらぬといふのと考へらるゝ  
 今妻は頻る嗚呼と悶歎をいひてありましたが妻自身の  
 経験と東西夫婦間の事情とも密合に――まして之れは固  
 及び――左点を加へ結婚後四五年間、惹起いたします  
 笑厄の経験が就て申述べ――姉妹諸君の所笑覧と作  
 さいと存じますそれでは其の四五年来三朝の別を――  
 て簡單に申し上げますれば  
 才――と憧憬期との中――ませうか結婚後半年か一年間  
 持統教しまする花婿花嫁の光明時代であります俗子無  
 我夢中快楽の絶頂に在る時でありました男女相互の

△又就きまゝにいはすは、權ありあせむが私考へますより、はたが結婚期が日本より遅く二十二三才、四五歳、最も多い様を、すかう從て子を生む期間も日本よりは短いのであり、ますオニは自らの



短所と云ふ点と云ふ振る舞い方面の総てが見えないうちであ

ります

才二期は自覚時期とも申しませうか  
~~二~~年を要する

と青春の愛情は稍や冷却いたし馴れ親しむに従ひまし

て多少の飽きも加はり同時に双方の欠点隠所が微見へ

る振るなりまし  
 4年以前の子暗影を認むるのであり

ます  
 時代

才三期は及者期とも申しませうか如何せば其の暗影を

拂ふ幸福圓滿の域に達せらるるふかと悦び若くは抑は

る、のであります其の及者期に入りまし  
 5年を要する

ねまし  
 7年を要する  
 家庭が成立する事

時代



はなりますのです

世の破鏡の歎は陥りまするのほふくは其の友希期は

らずして破裂はす所のものであります又た自覚期の牙

期の中は彷徨して居りますのが風波絶へ間なき不幸の

家庭と申すやきで

旅星は一言を費しんく存じまするの如何とて其の

三期は無事な風にして此期の春風飄蕩なる理想の家

庭に別荘すべがであります

勿論賢明なる讀者諸君はこれをまゝとはせられはる

ある事と信じまするが要は躬らが實際の一部を極めし甲

近の例に依りまして申上ります



其れに三期中尤も大厄期とも申すべしは牙二期の暗  
 前座を敵ふの時であります牙二期中の夫婦の應對は  
 る乱脈の陥り愛情殆ど冷却して敬意消滅して信賴の  
 念薄弱なる人とするの時でありますかう其二期に入  
 りました時は相ひ親んで裸れが相敬して性恥やる  
 あると信じます卑近なる例と解いて夫婦間の言葉  
 使でありませう一期には何とさんアナ様など申しま  
 した者が牙二期に入りまると吹<sup>お</sup>び捨<sup>て</sup>るなり一歩進んで  
 牙イコ匠とお巡査さんに調ふりますので一々年を  
 附<sup>着</sup>いて思まつた言葉使の妻君も良人のオイコラを文<sup>ふ</sup>  
 まして突立ちながら列りて曰なると振り廻す様なり



△近か女尊男卑の風潮であります。わが西洋では極く下等社会は別と見ます。法で之を良人か  
妻居る腕力とかやう極の事はあつた。男尊女卑と見ます。夫婦間の腕力決つた。おのゝ腕力と被り

たいに  
をす

か	す	次	る	み	一	を	使	の	神	ま
き	く	上	の	入	左	一	の	目	が	す
い	様	の	災	り	な	と	態	目	姓	の
極	子	厄	あり	や	ら	オ	度	を	ま	ど
こ	想	難	ます	曲	う	イ	ど	歌	り	夫
信	は	の		組	ば	コ	が	え	甚	婦
じ	れ	経		の	紅	ろ	常	し	一	の
ら	ま	過		幸	猥	ろ	二	と	き	別
れ	す	は		福	性	き	夫	る	は	も
ま	が	結		時	疎	呼	の	事	腕	崩
す	其	婚	代	入	の	ぶ	對	二	力	れ
前	の	後	者	る	繁	の	し	る	ゆ	得
申	傾	十		事	子	餘	ま	の	佐	牛
上	向	中		が	陪	地	一	で	の	勝
ま	は	の		去	る	な	敬	す	既	牛
一	日	七		来	こ	か	虔	そ	劇	が
九	本	八		ま	と	ら	意	れ	を	増
西	より	は		ふ	一	一	と	で	演	長
洋	と	大		と	と	極	妻	妻	じ	ら
の	方	概		信	三	心	居	居	ま	も
二	方	慮		す	姐	掛	人	言	一	こ
万		遇				け		葉	て	に



が愛情の降るに露骨なものと男女同権などの主張より  
 一まゝに又西洋の男子が結婚する所の女子對する  
 態度即ち女の歡心を得んがためと習ふて修飾を事とし  
 しまする点より殊一まゝに結婚後失望悔恨悲觀等の續  
 起するも通理とせられまゝです  
 斯る厄難の渦中を経過し一まゝ左不運の妾と相思  
 して生意氣なりとの成比を許され一讀に終はる満堂  
 の上もなく終ります  
 西洋の女性は今婚と既婚との拘はりませず表情の巧み  
 な事は幾々日本婦人の企て及び所ではありません以れ  
 は芝居などをして俳優の演ずる巧妙なる表情の態度を



其根良人の向て演ずるものであると申しても宜しいが  
 才唯だ恨むらんは日本婦人が其の巧妙なる表情の能なる  
 と持て居ります。之を羞恥と憚りとのそめと演ずる  
 餘地のないのは止むを得ん事があります  
 日本の如く良人の差遣は西洋では嚴格に行はれ居る  
 ませんが偏し妻君が良人を遊ぶる態度はの壹嬌に満ち  
 る有様は如何にも演劇的であります。良人が其の妻君  
 の顔に接するまゝと一日の苦勞もなから慰養せらるる  
 て心身共に爽快なること云ふ凡そ見ゆるので西洋の  
 言葉に良人として居る位の上の快楽の天地と思惟せらるる様心  
 を尽せる良人の心常々外を思ふが如きは事難うもの、恥辱なりと  
 思ふ



我邦の夫婦間の應対は餘り又醜くはないかと存じます  
 す所より見れば前次も申すに結婚の新法を案定す  
 るに従ひまして其の夫婦間の應接も改良を加へたい  
 のであります併し妾は女尊男卑などであらねども其所  
 望を致す法ではありませんと出来ず事ふら米劍流の男  
 子と進行かなくとも之を倣ふりの男子と日本流の女性  
 とを融合し一対の夫婦を作りまして之をば必ず理想  
 のホーリイが出来たる事と信ずるのがあります  
 本邦の嫁りも臨みまして妾は成功する我邦の妻君と  
 西洋の成功するそれとの二つを並べ置きますと果し  
 と何方が幸福あるべきかと云ふ事を考へて見たいと



想ひました切論書の妄断憶脱を過ぎませんければ又其  
 分法参考の資料たるべき点のあるやむと存じますので  
 先づ其前提と致しまして西方の何れが成功するに容易  
 なるかと申しますれば無御西洋の方が容易と想はれま  
 す西洋とは良人の奉仕を怠らすして自分の職責さへ  
 満足に尽さば足るのであります我が我邦では良人よりは  
 妻君重要の務めと致しまして舅姑に仕へる事が甚だ難  
 題難事でありまうから西洋の妻君は氣平で我邦のは困  
 難でありまう婦人世界の万事は苦勞の多寡を比例して  
 報酬が現れるのでありますから其の報酬の対する成功の名



答も決して同目の端ではなからうと存せられまう去り  
 らがう愛の注意すべき点と改しました。これは西洋では結婚  
 を江戸では直ぐ一家の主婦となり主人公となり一家の  
 経営に任じます。けれども我が邦では一家の主婦となり主人  
 公となりまうまでには幾多の年月を要します。詠で銀と其妻  
 仕なるものも軽重がある次第です。これは我が邦人は結  
 婚即ちまうとも家庭の練習生として数年を費す秋であ  
 りまうて其の練習を了へまうて始めて一家の主婦  
 とならうてまう現代の我が邦人は結婚後直ぐ一家の主  
 婦として之を経営するの能力を識あるやといふは未だ  
 俄かに前途し難き点があるかと想ひます。要するに西



洋婦人と我邦婦人との能力才識が多少懸隔があるにせ  
 ゐかと氣遣はるゝ節があるのでも男一に左様だと取  
 ますとは多分多量に練習生活に辛甚の裏にぬすゝと將來  
 の良妻賢母とある必要と取せられすゝ一に我邦の  
 家族なるものが西洋の夫婦本位と大なる差違の存在  
 に一ますゝ以上必然の流程とあるから水ますゝ斯く事情と  
 異なり一ますゝ<sup>すゝ</sup>我邦の威効一なる妻君は幸福の点に於  
 き一ますゝ<sup>すゝ</sup>危雲の点に於き一ますゝ西洋のそれ以上と信す  
 るのでも是れ即ち富貴の多寡に比例一なる当然の結果  
 にはありますゝいか我邦のそれは威効しなる良妻賢母と  
 一ますゝ一村一郡一縣に持て囁きられ一ますゝ社会の風教の偉



大なる功徳を顕はしますことは数々耳に及ぶ事であり  
 ます。が西洋では絶無には申せませんが餘り聞かぬま  
 せぬの如くあります。勿論西洋でも或るの良妻賢母なる  
 人如く居り承ります。此のありませぬが社会組織と家族制  
 度の異なるります。是より人自る意よく機会を必しく  
 人心を感動せしむる事難くふいのとあります。それ  
 こそ妾は特等な婦人ながら一層の努力と精励とを以て  
 其の道徳を發揮せしむるに燃えたる成るの實を人ならん事  
 多し祈ります。

衣服女子雑誌

我邦女子は娘侍士の如く嫁入しては親御さんは身代主



今も此の種々彼山系に衣類を振らへます凡てありま  
 加西洋では概して左程の所持して居りません  
 とい毎年新流行として衣服の形状が異なりま  
 社交に入る貴婦人は勿論中流以下の婦人方も大抵新流  
 行の一篇は是れに倣ふなりませんそれ毎年の  
 新流行と違ふ事ですから何時とはあらず漢山に  
 すが時流後の服となりまゝは痛物も同様です  
 束の一定ぬきまゝた衣服は時流に倣ふ  
 普通西洋の婦人等は家庭の時も綺麗なる衣服を  
 着て居りますので外出の時と別段相違はありま  
 せんまた  
 束の束に接しませる時には半礼服を着用致しませ  
 んで先



づれ服外古服平常服といふ衣であります月半の如く  
 重ぬ着と申す事があります人の足程に服の種類も我邦  
 程必要がなとのとす様か子り4一ト袴下と云ふ物は  
 ニッ信し重ぬますが下着に到りますると息と冬とで地  
 笠の要無位の差であります服の地質になりまゝこれ餘  
 り大した相違はありません綿木織絹といふのと上  
 から下までお強づくめなその事は到底視る事は出来な  
 いのとあります子婦一人がう西洋婦人の丈のスラリと  
 路一才を履き身体は格好よく縫裁製り上げられまゝ左頁  
 風采容姿の美麗なる事は裁縫が曹司の職業となつて居  
 りますので婦人自身何人とも申分ないのとあります



日本婦人の如く

次の裁縫は就て申上りまするが西洋では裁縫が専門の職  
業となつて居りますので婦人自身は裁縫致す様之事は  
ないものであります故に西洋では裁縫は一般婦人々々  
之習得せられぬ仕事でないものとす上衣袴は勿  
論下着の上と下の別で中次下の婦人は出来居る  
に其は裁縫は中次とになりまうと裁縫婦人を雇  
入れたりて身体に合はせ仕立てるのであります尤も下着  
は総て店にて買おめますが申しますに裁縫は申すに裁  
縫を心得居らぬとは申す訳けではありません併し西  
洋服の仕立方は日本服と異ります不う到底自分様で  
自分の身体に合せて仕立てる事は出来ぬ仕事なのです

帯外  
帽



前へ後へ首肩背腰の廻り等一々實地の足踏ますので身  
 体の形が成り、仕えますから、この事では日本では大抵と  
 行きとが合ひます。此は身巾などは如何様にも繕はれま  
 す。同様に大抵は親の物は子も着させます。西洋服は  
 日本服の如く融通は利きません。他人の環ることを許さ  
 ねども仕え道をする必要があります。のですから仕え通  
 すとそれには仕え賃が減法高賃でありますから、~~服~~他が極  
 くと着物でまだ何處にも備のない物でなく、これは鳥渡考  
 へ、これです。日本では服地が非常に高賃で仕え賃はお  
 安いので、すから至極便宜です。けし其西洋では男女服に  
 限らず、服地は安賃で仕え賃が高賃です。先づ其割合を見



乃至五那

西	婦	あ	本	免	男	の	の	そ	て	ま
洋	人	く	婦	へ	渡	で	女	二	す	す
二	観	様	人	ま	係	か	暇	弗	雪	と
三		と	の	し	事	ら	を	出	岡	眼
は		す	巧	と	で	仕	製	十	裁	他
極		か	妙	白	は	三	一	仙	縫	の
貧		純	緻	人	あ	侯	上	上	職	懐
民		衣	密	家	り	加	三	佛	婦	え
の		は	を	座	ま	高	十	出	人	二
娘		一	る	や	す	候	仙	十	の	仕
と		周	牛	白	か	二	位	の	一	五
入		百	糞	人	起	上	で	組	口	侯
十		十	を	裁	来	二	あ	ハ	の	は
字		二	現	縫	日	周	り	時	組	儀
校		那	け	居	本	か	ま	同	ハ	上
は		与	と	を	婦	あ	そ	佛	時	二
思		十	て	ぞ	人	り	へ	と	同	儀
思		五	居	八	で	ま	偏	一	佛	三
非		那	る	は	所	す	れ	ま	儀	二
卒		位	こ	業	洋		業	一	二	互
業		と	こ	と	の		日	着	三	る
仁		事	も	日	裁				儀	の
さ		す	澤		縫				二	
世			山		と				三	



ます娘の働で家計を補給する必要がある以上は大概ハ  
 イスクリル即ち中学迄は学ばせませう中学から以上は  
 りますると本人の望む仕せませうと大學校へまゐります  
 ので日本では高等小學校で普通教育を終へたもの  
 としてありますから西洋では中学以上でなければ普通教  
 育を受けられないのです其の教育程度は相  
 違は即ち我邦婦人と西洋婦人との間は大なる智識上の  
 懸隔を有して居ります其の智識上の懸隔は総  
 ての點で顕きまゝで相違を生じまするので輕ろくく  
 東西婦人の價值を論断する事は輕躁なる事と存します  
 易得せ尊男界の極端なる風俗は少時く措くとぬしあし

尚ほ又

△我邦の如く箱入り娘とある風は殆ど世俗の風俗に馴れぬ娘を指すものであり、西洋では  
 娘時代より自由自在な社会に接觸せしめ、其の學問教養は常識が発達するを旨とする



とも男女同權を唱道は——まする以上其學問見識が男子  
 と對等の位地の處せず——ては正當合理の主張とは申さ  
 れまじぬのですから女子の教育が男子と同等なる處き  
 は當然の事と信するのであります既其學力見識が就  
 ち男子と同等或は同等ならざるも男子の執れる徳その  
 業務が就ち容喙し或は相後相半するべき資格を有し居  
 る西洋婦人は社交上は就ちも家政上は就ちも我邦婦人  
 より一歩を進め居る事は必ずしも妄断ではあるまいと信  
 ずるのでも低ひま——結婚後直ちに新家庭の主婦とな  
 り一家を強固するも善友へなく又左良人の職業其他良  
 人の欠点要癖等を匡正し充分補助の實を擧ぐる事が出



来るのでありませう。新づ一枚と持ち来りて比較せしめ  
 す。西洋婦人は、倫理も、文藝、小説、電報も、商売も、讀みま  
 其他家庭、個人、職業、注意を怠らず、一に居ります。が、我々  
 子とは、婦人は、雅趣、か、小説、の、れ、である。所より、ぬ、ま  
 一、も、其、全、班、が、親、は、此、の、根、であり、ます。東西婦人の相違  
 の、点、を、其、位、に、ぬ、して、是、を、ま、し、て、婦人、教育、の、事、に、就、き、ま  
 一、は、別、項、に、案、見、を、申、述、る、事、に、致、し、ます。是、れ、で、西洋の  
 主婦、人、は、何、れ、も、快、楽、で、愛、嬌、に、富、み、居、ら、れ、ます。其、の、快  
 楽、愛、嬌、が、西洋婦人の、天、性、特、質、と、申、す、可、い、は、あり、ませ、ん  
 が、西洋、では、男、女、の、交、際、が、公、開、せ、ら、れ、社、交、界、な、る、もの、が  
 婦人の、本、職、とな、つ、て、居、り、ます。の、で、性、開、放、嬌、な、る、上、際、上



の必要素質が自然発達する彼とて思はれます。婦人がある  
 ら西洋婦人とは快楽嬌嬌の特質がある。これも抑うが無限  
 りもなく老嬢達がオールドミス居るのは如何と不思議の  
 現象であります。自由結婚と生活難の影響もありま是  
 け水災一瞬西洋婦人は意識が高いのです。かう男子と居  
 とし思はない風があります。結婚時期十七八才から  
 廿四五才迄の女子大抵見切を附けて結婚申込に意深と  
 共へませんと遂に不棄なるオールドミスに終生家庭の  
 快楽を味ふ事が出来あいのであります。是れを西洋婦人  
 の特徴或は自由結婚の弊害とも申す可ま。素と信じま  
 ます。此の老嬢方は如何なる生活をして一つあるかと申



何等かの職業を執り自活しつゝ度りますのである

や	中	も	西	せ	と	人	ま	ま	時	一
る	幾	二	洋	ー	あ	は	ま	ー	は	ま
と	年	十	婦	む	り	餘	ま	ー	は	ま
尋	の	臺	人	る	ま	り	あ	而	は	す
ね	お	の	の	る	す	オ	が	も	は	る
ま	婆	の	最	る	オ	ール	と	常	は	と
う	さ	花	も	足	ール	ド	と	任	焼	素
と	ん	々	若	ら	と	ス	西	配	恒	より
阿	の	ん	心	あ	一	と	洋	遇	な	り
な	あ	の	配	い	と	一	を	ち	る	の
花	な	見	し	点	は	と	我	人	の	財
年	は	ら	ま	の	は	一	知	事	生	産
と	大	と	す	の	其	と	同	の	涯	あ
想	妻	一	る	で	北	用	く	若	を	る
ふ	お	事	点	あ	窓	と	窓	心	送	方
ま	婆	を	は	り	白	同	安	一	り	は
す	い	と	四	ま	餘	く	優	と	つ	極
と	幾	一	十	す	り	窓	美	居	、	別
聞	年	事	の	の	異	安	な	る	あ	さ
え	が	を	お	で	性	優	い	の	る	も
ま	居	初	婆	あ	を	美	と	で	あ	を
す	に	四	さん	す	意	な	あ	り	り	き

△か時機は既に去りし一人として男性の言に密着する者があつた。そので實際お氣の毒の訳です



左様私の月日は二十七八と想ひますかと居へましたら  
 其表紙と申すものは左の如くありませう其が我知で  
 ありませう一種の軽佻柳榆とも思はれまゝと自分と  
 却て表面する程の事でありませう然るに西洋婦人は本心  
 から喜んで居るの如くありませう所より考へますると其氣  
 ての苦心の程も窺はせまうると同様に其無邪氣淡泊な  
 る美点も認めらるゝのであります  
 斯る次第でありますから西洋では姫時代では格別の嬌  
 姿でなると粉黛を施さずとせよと云ふ如く前代よりお  
 化粧のお白粉の厚さや度数が段々増加してゐる紅お  
 白粉の費用が高まりまゐると何時までも其飾用品が多くな



天にありますが結婚後にはありますと層一層の進みまし  
 て夫婦となりて最早や再婚の望みたる言ひたのお婆さ  
 んになつて嫁めてお化粧を厭するのではありません我々の  
 婦人より視ますると全く反対であります——我々は結婚後には  
 結婚時代は格別一人でも子供を授けませうと云ふがこれ  
 こそ成りぬ振るも関はが化粧を忌は儀式の場合が  
 未嘗と接するが時高み出す位の時で限りますかこれ  
 はこれには西洋のやう婦人の方やう方が思ひいと知らま  
 す西洋の言葉によつて自身の内面と顔面とは化粧の如く異  
 何れも清新なうめよ思ふは婦人の善徳と云ふは後より云ふ  
 格と云ふ結果より云ひ止むべきなり）婦人が社会の柱でありま



一、家座の女王たる以上は洒落なる風姿嬌如たる態度  
 妻嬌ある態度とは婦人才一の務むべき要点と存する  
 りてあり  
 婦人の筆馬の然る一言ぬきしより吹米では婦人が筆馬  
 ぬきしすが當必婦人の舞馬法は少くも男子の筆り方と  
 違ひません通は古風の横の腰掛けに居る方とありま  
 すが多きは男子の様に何人か舞の月日は豊穡に映  
 じますのみならず其の筆馬のたぬ石姫庭より起す  
 婦人もあるとの事です  
 要は素より女性の事でありますから洒落婦人の脂黒面  
 子就きまゝには何等知る所はありませんか又左列の麗



見する必要もないと存じます。去水と暗黒面と亦左所の  
 一面と取ります。水は水とく観ふても宜しからんかと  
 存じます。或る在来の男子の方子就て尋ねます。左所  
 男子の方は頗る滑稽趣味の富人で居り水ますので左の  
 水も春も此へて水もました

⑩花嫁御先づ鉢巻と腰子締め

⑪殺人を医師に任すつく五嬢もあは

⑫藪医師も殺人のみで終日

⑬妻君も良人の責けを負えと云ふ

甚だ其意を深きでし次で以て水は水とく観ふても宜しからんかと

存り露骨晒方の感じます水は何れ暗黒面の事であり



ますから證するに事實の真相を掲げまするよりは幾分  
 滑稽趣味のあるものもあると見えてゐるが、一たび  
 あります

西洋婦人は常に他人の要になどを婦人同士或は男性  
 の名に向て同姓名の批評などは致さないものがあり  
 万葉社会の風習も一には我が邦の井戸端会議とくち申  
 すべきものであります。が上等な婦人は程斯う徳義を重  
 する様な事はないのであります。其の点などは我々の  
 一と學ぶべき点と存じます。全体に於きまして西洋の  
 社会は極めて外觀上は修飾せられてあります。一例を  
 申します。ありは其国家の女子は例の職業婦なる者は法律上



許可せられ居りません。けれど一度は市街に臨み  
ます。ならば一丁四方も軒を並べまして公々然と醜業を  
営みつゝあるを見るのです。当オースランが市の如きは  
市街所の建物の周囲は全然此等の怪物を以て圍繞せし  
水と居ると申す事です。然れども政事派の言はせますと  
暢々然と江戸まで我輩には醜業なるものなりと公  
言するのを憚らぬのであります。公許さるゝ以上は斯  
く言ふ事が出来るのであります。が陰謀修飾なく事實と  
申すと江戸には公許したる醜業婦はなほ黙許の醜  
業婦はありと申のが至当かと存じます。斯様で總ての  
暗黒面は知ると知らざる風を装ひ見送かゝるべき否



△新聞紙にある婦人斯る報道を為す事を許ける所様子見(まじ)

紙の蓋を為して事然見へさる如く装ふ所などには如く申  
 せば公徳心の希薄云々く申せば馬糞と錦と包みたるの  
 社会とも申すべから斯る次第でありますか？妻君や令  
 嬢の醜態陋状を世に社会に発表せらるゝ様う事は極  
 めて稀れである事と信じます △  
 独逸には少婦と長く遊びましたから独逸婦人より就て申  
 上ます流石は大帝国の事でありますし階級ある国柄我  
 邦と同様でありますので当分の少婦人は強心と我邦婦  
 人と餘り異なる点と認めさせ世人所望家然の如く従順とし  
 て謙遜で英米等の婦人とは大なる相違がある様です周  
 りに好しよしと云ふ曾大衆も点よく逢中周子と邂逅致し



ますれば婦人の方より会釋をねます殊に當劍の婦人  
 は終に勤効で懐妊をあります食しき者となりますと  
 夫婦共縁が子供まで進まし勵を居るのてす從て生  
 治の度合なども衣類其他終に質素をありまし英米の  
 様な聲浪は江し居りますん其人氣性情を是ります  
 も極めて雙朴の親切をありますと申しまし主婦と  
 しこの見識とか貴女としこの地位とか申す事は充分自  
 覚が出来て居りますし是れ善惡の差別なく男子も黙從  
 する様な事は無いのてあります尚ほ當劍婦人は如何な  
 る訳かは存じませんか當時英米婦人界に風靡して居り  
 まする女權擴張の階級なきは強人とい別世界の消息でも



北	あ	り	ま	す	が	其	他	放	障	下	き	限	り	は	大	概	一	二	周	内	より	長	
あ	る	か	の	様	な	風	馬	牛	我	関	せ	す	馬	と	云	ふ	風	と	の	事	で	一	を
西	洋	婦	人	方	は	何	れ	も	外	出	が	好	い	で	居	る	せ	ま	す	買	物	の	行
か	れ	ま	す	の	は	別	館	と	取	一	ま	し	五	年	后	は	必	ず	二	時	間	な	り
三	時	間	な	り	の	外	出	る	な	と	水	す	君	し	は	お	五	産	と	預	め	世	
ら	る	、	の	で	あ	り	ま	す	又	左	親	交	あ	る	婦	人	友	産	元	も	既	婚	の
方	々	が	俱	年	都	と	申	一	と	カ	ル	夕	合	と	自	一	冊	巡	番	主	人	側	
と	な	り	ま	す	一	極	び	廻	る	で	あ	り	ま	す	時	刻	は	午	后	一	時	頃	
か	ら	お	暇	取	在	て	子	孫	ま	せ	ま	し	と	良	人	の	暇	取	する	頃	は		
各	船	尾	一	と	居	る	事	と	なる	の	で	す											
あ	回	の	中	等	上	の	生	活	を	為	一	と	居	る	若	は	多	く	の	子	供	で	



きは土六週間離暑をねします家族一同赴く事もあり又  
交代の赴く事もあるのでも其の点に至りますと西洋の  
婦人方は實際お楽な事と存じます。離婚の原因は最も  
も睡眠江すかとも思ひます。西洋婦人は概して園藝趣味  
深い様です。自分の庭園の管理は強んど自分で行われ  
ます。或は自ら缺をとりまゝに或は雇人と庭園師を  
てゆき草の絶へない様な庭園の管理を怠らぬといふ  
りあり  
既婚婦人の罪惡を就きまゝに又は先次アウトルック誌上  
前大統領ルースベルト氏の白人の滅亡なる題下で論じ  
ら水生したのでも了解する事が出来す。其後論の要旨

人的

の一部



と物ゝまする所は既婚婦人か人為的の離婚をなさず事  
 を以て撃破せられたいとあります勿論其原因は生活上  
 のものなる事でありまじうが要する原因は個人主義の弊  
 害と物ゝます即ち子供を多く出来さすは婦人は子  
 供の教育に忙殺せられまじう自分慰ふ程の愉快も亦  
 出来ないと云ふのが十中の九まであると云ふです是れ  
 は實に質の悪い離婚の方と申さなければならぬ事と云ひ  
 ます又云ふと婦人の暗黒面に窺ふと定まればありませ  
 んか  
 究る角も何の限らず長短利便は免れませぬ人間の進り  
 まし左家の構へやれ前面の構造装飾と裏面の構造装飾



とは非常なる相違がありますのですから自然に出来ま  
 し上より生長する向の境遇習慣教育の方針等より  
 して感の影響を与けまする人間でありましかうか  
 一極には行きません善悪とも子種之類多ある結果を  
 質するのには遠かたせぬ事と信じますそで善等は他  
 の長と採り吾が短を補ふの心掛け肝要と存じますので  
 今終りに臨みまゝ一に概観して申します此は西洋婦人は  
 男子の玩弄物たりさる大けの見識ある事仕事に用ゐる  
 家政と料理するの手腕ある事良人の職業に就き相談相  
 手たるべき知識ある事社交の界に在る事表向の巧みな



る事快感と起すべく実安を慥ふる事他人の思得と為す  
 る事子女の教育と全幅の精力を傾注する事等は事等日  
 々婦人の排るべき要と存しまた其の性質の優劣ある  
 礼儀の篤く慈愛の富む等の事は物部婦人にも缺く一  
 等と稱する所ありとは存じませぬが如くありませぬが如く  
 婦人よりは其筆跡が雄々しい点がありませぬが如く  
 して疾走する如き五人乗の用車と運輸して市街と  
 横行するとか馬車を御して鞭を揮ひます如き或は砂  
 鈴の令嬢達が青年男子と牽遊ひを為して馳せ廻る如き  
 は如何に淫靡とあるか！ 窺はるべきなり



